



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.28

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.28. 実践
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147111>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No. 28 2011年2月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市朽木 市場

守山フィールドステーション

つつましく、風土に寄り添って

聖泉大学 高谷好一

バンダナ・シバさんが来日されるのを機会に、「バンダナ・シバさんと琵琶湖からの発信」というフォーラムが開かれることになった。地域や生態を中心にしたフォーラムになるはずだ。私もお手伝いすることになったのだが、どんなフォーラムになることを期待するかという質問があったので、私は次のようなことを述べた。

私たち人間は自然に比べると小さなものだということを確認しよう。地球上には多様な生態があつて、私たち人間はそのうちの一つに寄り添って生きている。そうして生きてこそはじめて、安定しているし、安心の生活もできるのだ。人間だけでなく、家畜も、野獣も、草木でさえそうなのだ。と、そんなことを確認し合えるような、そんなフォーラムにしてほしい、と答えた。

東日本ではとてつもない震災が起こった。被災された方々には、心からお気の毒だと思う。私たちも出来るだけのことをしなければならないと思うのだが、同時にこんなことも思う。私たち人間は、いささか増長しすぎていた。自然を甘く見すぎていた。東南アジアの山地民の人たちがいつも言っていたことを思い出した。

「森はありがたいものです。何もかも、そこから得ることができます。だが、横着に振舞うと大きなバチを当てられます」。

地震は突発的な天災だったが、今度は人災で似たようなことが起こりつつある。TPP がそれだ。これは農産物を含めてすべての関税を撤廃し、世界の経

済を活性化させようというものである。多様な地球上の生態のひだに寄り添っているのが農業だ。その風土や歴史を踏まえて、つつましく生きているのが農民というものだ。そして、この農民が世界を支えている。この事実を忘れて科学技術と経済だけがあれば何でも処理できる、と考えているのがTPPだ。こんな横着なことを推し進めていくと、きっとバチが当たる。

今度のフォーラムではそんなことを皆で考える機会にしたい。そのように私は答えた。

水と土と農のフォーラム
バンダナ・シバさんと
びわ湖からの発信

主 催：水と土と農のフォーラム実行委員会
後 援：滋賀県、滋賀県教育委員会

開催日
2011年 4月2日 土
10:00～17:00 (開場 10:00)

会場
滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール
大ホール・ホワイエ

料 金
一般 1,000円
大学生・高校生 500円
中学生以下 無料
(展示ブースのみ見学無料)

大ホール 13:30～17:00 (開場 13:00)
プレゼンテーション
横山 和成 さん (中央農業総合研究センター)
アラン・今井 さん (南明インターナショナル)
特別講演
バンダナ・シバさん (環境活動家)
高田 由紀子 さん (滋賀県知事)

ホワイエ 10:00～13:00
展示交流ブース
環境問題や持続可能な農業に取り組んでいる団体の活動紹介。
子どもたちの環境活動紹介、芸術作品展示コーナーを設けています。

お申込み・お問い合わせは、裏面をご覧ください。

図1 フォーラム チラシ

焼畑とボッタまきと農耕神話

滋賀県立大学／朽木FS 黒田末寿

1. 循環型農法としての下肥利用

明治に日本を訪れた欧米人は、日本の農民の下肥利用を循環型農法と賞賛する側とはなほだしい悪習とする側に分かれた。生活が近代化し、衛生思想と化学肥料が普及するにしたがって、下肥は農業から駆逐されていったが、高度経済成長期までの農民にとっては、熟成した下肥はかけがえのない肥料であった。

滋賀では古い農家の便所は、ほぼ必ず東南の隅にある。岡山の私の実家もそうだった。そこは玄関近くでもあり、日当たりがよくて、梅を干したり「ひしお」などの発酵調味料を暖め、ネコがひなたぼっこする、便所さえなければ居心地のよいところだった。なぜその近くにハエの発生源である便所を作るのかと思っていたら、江戸時代の農書『百姓伝記』にし尿熟成を早めるため家の東南に便所を作れと書いてあった。農民は居住の快適さより肥料作りを優先したのだろう。

し尿の使い方は、彦根あたりでは、尿は風呂の残り湯で薄めてそのまま畑にまいたとか、大便是湖岸域では砂地に浸透させ、それでも残るものを家庭排水で薄めて畑や田にまいたとかいろいろ聞いた。私の実家では、し尿一緒に野づぼに移して熟成させ、薄めて施肥したり、堆肥の草や藁にかけた。甲賀・伊賀の古琵琶湖層の重粘土地帯では、青い粘土土壌を草などと重ねて庭に積んだものをクマシと呼び、下肥をかけて熟成させつつ、大根や蕪をその上で数年作付けしたのち、水田に客土兼施肥した。

現在、し尿を嫌気発酵処理し熱で乾燥させ有機肥料化して無料配布している市町村が多い。この工程は少し悪臭が出る。しかし、下肥を堆肥にかけて発酵させると悪臭が消えるように、昨年亡くなられた小森清喜さん（小森バイオ：堅田）が自身で発見した枯草菌の一種を用いて考案された処理剤は、悪臭をほとんど出さず、し尿を速く分解する。し尿を再び循環型農法に用いるには、こうしたバイオ技術が欠かせない。

2. 下肥を利用するボッタまき

北上山地には、焼畑にヒエやアワを播くとき、下肥を使う「ボッタまき」（あるいは「ジギマキ」と呼ぶ方法がある。佐々木誠（1975：現代農業作物編第7巻）や久慈山根六郷文化研究会のビデオ、中條眞介（2010：岩手県農業研センター研究報10）などによれば、熟成した下肥と草木灰または過リン酸石灰を泥汁状に混ぜ（これがボッタ）、それに種子を混ぜたものがジギで、それを手桶に汲んで素手で畝に直播きする。ジギが汁状でかつ素手でないと、種子を適量播くことができないが、悪臭が肌にしみ込んで取れず、非衛生的と若い人たちには嫌われてきたという。

ボッタまきの効用は、播種期が乾燥期に当たるのに対し種子に湿り気を与え発芽をよくすること、雑穀は少肥作物だが、芽生え時に肥やし負けしないため、種を包む肥やしが初期生育を早めて収量をよくすると説明されている。ボッタは、畑に直径1.5メートルほどの浅い池を掘って底を固めたボッタ穴で作る。ボッタ穴は神聖な場所とされる。不浄の下肥が種と神聖さに結びつけられていることは、食物神であるオオゲツヒメが食事を排泄してスサノオに殺され死体から五穀を生み出した神話、あるいは、イザナミの尿から生まれたワクムスビが五穀・養蚕の神として祀られるのに似て興味深い。話が飛ぶが、類人猿の糞は食物樹の種と植物繊維の混合で繊維は種に発芽の湿り気と初期肥料を与え種子食者から種を守る。人間の糞も似たものだから糞からの芽生えに気付けば農耕が始まる。ボッタまきは、農耕とその神話の起源を再現するかのようである。



写真：余呉の焼畑。スナップをきかせて薄撒きする。

亀岡フィールドステーション

亀岡の農業と自然－保津川の湧水が育む自然－ 京都学園大学 大西信弘・鷲尾朱音・三宅慧

以前、本ニューズレターにも書いたが、保津川には湧水地がある。これまでに見つけた湧水地は、たまたま見つけた場所がほとんどだ。生き物たちの越冬場所として重要な湧水地を効率的に発見するため、昨年の冬、亀岡市の事業としてヘリコプターを使って、保津川周辺の温度を調べた。その結果、保津川にはいくつもの湧水地があることがわかった。場所によって多少は水温が異なるのだが、2月冬の寒空の中、保津川の本流が8℃を切っているような季節に、15℃を越える場所もある。

小魚たちが人目に付くのは、やはり、春の小川と思うだろう。ところが湧水地には、その周辺で暮らす魚たちが、場所によっては10種類以上も集まって越冬している。保津川の河川敷は、夏、大雨が降ると増水で水没してしまう。そのような環境なのに、今は亀岡でも見かけることの少なくなったメダカを始め、亀岡では寒バヤとして食べられてきたオイカワ、そして普段は支流の上流域で見かけるタカハヤなど、さまざまな魚を見ることができる。

集まっているのは、大型の個体だけでなく、2cmほどの生まれてそれほど時間のたっていない小さな魚たちも群れ集まっている。これまでに見つけた湧水地の多くは、冬季、こうした小魚たちの越冬場所となっている。どこに行っても、冬、寒い季節なのに、水はぬるく、場所によっては青々と草が茂り、そこに小魚たちが群れをなして泳いでいる。

ちょっと驚いたのは、ツチガエルの大型個体が越



写真1：ヨシ原を流れる湧水。写真の右端に見えるのが保津川の本流。

冬地として利用していたことだ。ツチガエルは普段は、水田周辺で見かけ、保津川本流付近では見かけたことがない。しかし、こうした生き物にとっても湧水地は重要な機能を果たしているようだ。

詳しくは、今後の調査が必要だが、直感的には、保津川の本流、本流に流れ込む支流、支流流域の水田と用排水路、そして保津川本流に点在する湧水地、こうした様々な環境の組み合わせが、亀岡の豊かな自然を育んできたのではないだろうかと思いが膨らむ。当たり前だが、生き物たちが生きながらえていくためには、生まれ、育ち、繁殖し、冬越しをするという、全ての生活環境がそろっていなければならない。冬、寒い間は、湧水地で越冬し、春、水が温むと支流の流域の水田周辺の環境で繁殖し、支流と本流で育ちながら、繁殖を繰り返して、再び寒い季節を湧水地で暮らしているのではないだろうか。

これまで、亀岡の自然を育んできた水田農業の役割について注目してきたが、水田だけが重要なのではなく、その周辺の環境の多様性と、そうした多様な環境のつながりが重要なのだろう。そうして考えると、単に水田環境で生き物が増えているだけでなく、人の作った水田と、自然の作りだす河川環境の組み合わせが亀岡の自然を支えてきたということができるのではないだろうか。



写真2：水中のヨシの枯れ草の中で越冬するツチガエル。体長は6cmほど。普段は、水田などで見かけるカエルで、多くの場合もっと小さな個体ばかりをみかける。カエルの越冬地についてはあまり知見がないという。保津川本流の湧水地は、普段の生息場所ではないと考えられるが、こうした季節によって使い分けている生息場所こそ、保津川周辺の生物の暮らしを考える上で重要なのではないだろうか。

■第32回 定例研究会

1. 日時：平成23年2月25日（金）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者1：アッケル・アリ（農村開発協会・バングラデシュ）

発表内容：「バングラデシュにおける村のNGOの新しい農村開発アプローチ：JRDSの活動紹介」

発表者2：ウドム・ポーンカムペン（ラオス国立大学農学部）

発表内容：「ラオスにおける水産業」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議」開催報告 東南アジア研究所 安藤和雄

東南アジア研究所の国際共同拠点公募研究「ミャンマー、バングラデシュ、日本の農村の生存基盤に関する相互啓発実践型地域研究」（代表大西信弘、京都学園大学）を、京滋FS事業との補完・連携する研究活動として平成22、23年度に実施しています。大西さんと私の他に、矢嶋吉司さん（京大東南アジア研究所）、南出和余さん（桃山学院大学）、辰己佳寿子さん（山口大学）、中野恵二さん（保津町自治会）、田中豊文さん（NPO 周防大島自然体感クラブ）、海外からはキン・ウーさん（イエジン農業大学、ミャンマー）、アッケル・アリさん（NGO JRDS、バングラデシュ）の各氏がメンバーとして参加しています。

アジアの開発途上国では、今なお都市生活の安直な賞賛に裏付けられた農村近代化が無批判に実施され、グローバリゼーションの影響が農村部に及んでいます。その結果、農村での固有文化や活力が急速に喪失し、この問題を放置すれば、やがては、現在日本が直面している農村部の過疎、高齢化の問題が、開発途上国にも現れてくることでしょう。私たち参加メンバーは、反面教師として、日本農村の現実の深刻な問題をアジアの開発途上国の人々に知ってもらいたいことと、日本の農村部に生きる人たちや関係者が、現在どのようにこの問題を克服しようとしているのか、その取り組みの姿を知ってもらいたいと考えています。「地域で生きぬいてきた」知恵や誇りを、里の自然環境とその利用、暮らし方、歴史、文化に求めて、具体的に自覚しようという取り組みが日本の各地域で起きています。その一つが亀岡市保津町自治会「水たん農園プラン」の主体的取り組みです。この計画の紹介をメインに、平成23年2月26（土）・27（日）日の2日間、「文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する

国際会議」を保津町自治会・上記プロジェクト・京滋FS事業と共催しました。「村の文化と生態資源を用いた農村開発に関する住民の活動」と「大学・NPO（NGO）・地方行政他との協働による農村開発」の二つのセッションが設定され、前半のセッションでは、保津町の取り組みが、『生きもの』共生で町おこし保津川すいたん農園プラン（塚田勇さん、保津町自治会）、「竹炭を使ってカーボンマイナス〜クールベジタブル〜」（酒井省五さん、農事組合法人ほづ）、「保津の歴史と文化の編纂」（西口すみおさん、亀岡市議会議員）として報告されました。また、翌日にはこれらの活動地域でのエクスカージョンも行われました。

後半のセッションでは、大西、安藤、矢嶋、辰己の各メンバー、FS事業の鈴木玲治さん、高知県大豊町から氏原学さん（農家）、山口県周防大島町から田中照敏さん（NPO ふるさと里山救援隊）、亀岡市文化資料館の黒川孝宏さん、バングラデシュからはアッケル・アリさんとモモタズ・ベゴムさん（JRDS）、ラオスからはウドム・ポーンカムペンさん（ラオス国立大学）がそれぞれの活動を発表しました。参加者総勢20名が活発な意見を交わしました。27日の京都新聞朝刊丹波版で「里連携で農村開発を」という見出しで、写真入りで本国際会議が紹介されました。

自覚を促すには「お互いを鏡のように知る」ことがもっとも有効です。本会議でもそれを実感できました。日本やアジアの国々の国内外との農村住民と関係者のネットワーク化と住民の主体的な取り組みへの支援の理論化と実践化が実践型地域研究の大きな課題の一つであると再確認できた会議でした。



写真：保津町心凜愛荘で開催された国際会議の様子（平成23年2月26日）